

イスラーム知識人に伝えられたチャクラの念想法

Visualization of Cakras in the Eyes of Islamic Intellectuals

榊 和良

Kazuyo SAKAKI

Abstract The widespread transmission of the Arabic and Persian translations of the *Amṛtakunḍa* testifies much interest in yogic literature among Sufis. Judging from the descriptions of Islamic writings in and outside India, various yogic practices were practiced by Sufis. The number of religio-philosophical textual studies on the interaction between Sufis and Yogis has been limited thus far. Sir John George Woodroffe introduced tantric scriptures with the help of Bengali pundits; he also witnessed the parallel idea of *cakras* in the centers of meditation described in the Sufi manual written by Dara Shukoh. According to this manual, they are called spherical heart, cedar heart and lotus heart. *Cakra* literally means a circle symbolized by a lotus flower and is used to denote a circle of deities or powers of such deities in yogico-tantric traditions. In the context of yogic discipline, *cakras* are the psychic centres of a body. The numbers and locations of *cakras* vary in traditions and texts. The most well-known idea of *cakras* is that of the six *cakras* which Woodroffe introduced to the pre-modern Western world, and was already known to the Islamic world through the Arabic and Persian translations of the *Amṛtakunḍa* and related works. Despite of no reference to the three loci of Sufic meditation; however, among the Persian translations of yogico-tantric Sanskrit literatures, these terms denote three *granthis* which are synonymous with *cakras*. A Sufi Sharif before Dara Shukoh's time, translated the *Gorakṣaśataka* and related works, creating these terms that have evolved in certain Sufi circles. We will confine ourselves to investigating the transmission of the concept of *cakras* and the origin of three centers of meditation in the available Persian translations of Sanskrit yogic literatures. We will also show how Islamic intellectuals understand the idea of *cakras* and interpreted it in their own context.

Keywords cakra (チャクラ), Sufi (スーフィー), Shaikh Sufi (シャイフ・スーフィー), yoga (ヨーガ), meditation (瞑想)

はじめに

三千年のインドの歴史には、数多くの出家者・遁世者・苦行者が登場してきたが、彼らに共通する実践法はヨーガに集約される。宗派を越えてインド精神の根幹をなすヨーガは、信仰ではなく実践であるといわれる。たしかに今日、ヨーガといえば、心を鎮めるための呼吸

法や、アクロバティックなポーズや動きによって示されるエクササイズや、超人的な難行苦行の実践などをさすものと理解されている。だが、これを可能にしたのは、アーユルヴェーダの伝統にもとづく身体観とさまざまな宇宙論的思弁を一つにした宗教的实践であるヨーガのもつ普遍性であり、私たちが眼にするのは多様な側面をもつヨーガの一部にすぎない。

多くの史料や細密画などが示すように、ヨーガを実践する人々とイスラーム・スーフィーたちとの間では、さまざまな形の交流がなされてきた。そうした交流を通してヨーガの実践法が伝えられてきたことはしばしば指摘される。だが、何がどのように伝えられたのかを検証する文献的研究はそれほど進んでいない。なぜなら師資相承の口伝を旨とするヨーガ道では、実践法を説いたサンスクリット語や近代諸語による文献の整理が進んでいないことと、それをイスラーム系言語に翻訳したものがまだわずかしか同定されていないからである。

ヨーガに関連するサンスクリット文献の翻訳に関していえば、『パタンジャラの書 (*Kitāb Pātanjala*)』と題される『ヨーガ・スートラ』の諸注釈文献にもとづいたアラビア語訳が真っ先に挙げられるが、ギリシア哲学の術語を駆使したアル・ビールニー (Al-Bīrūnī d.c. 1050) の関心は、ヨーガの思弁神学や哲学にあった。時を経て、ムガル帝国第3代皇帝アクバルに仕えたアブル・ファズル (Abū al-Faḍl d. 1602) は、『アクバル会典 (*Ā'in-i Akbarī*)』の中で9つのインドの哲学諸派の一つとしてパタンジャラ (パタンジャリに帰属するもの) と呼ばれるヨーガ学派を『ヨーガ・スートラ』の梗概により紹介したが、本格的な翻訳は残さなかった。

『ヨーガ・スートラ』は、古典ヨーガの体系としてパタンジャリにより編纂され、現在でもヨーガを実践する人々の拠り所となっているが、我々が今日イメージするヨーガの実践的側面は、10世紀以降、イマジネーションの力を働かせ精神生理学的・肉体的な修練に重点を置くハタ・ヨーガ (*hatha-yoga*) として体系化され、修道論にまとめられた。この体系を創始したのは、シヴァ教シャクタ派に属したとされる13世紀のゴーラクナート (Gorakhnāth) あるいはゴーラクシャナータ (Gorakṣanātha) という人物である。ゴーラクナートの教えや実践法は、「ゴーラクナートに従う者たち (Gorakṣhanthī) あるいは「教主 (*nātha*) を尊崇する者たち (ナータ派 *Nāthapanthī*)」と呼ばれる人々により、インド各地に拡大した [榊 2002, 2003; 遠藤 2008]。

この派の教理の一部が、13~14世紀に『アムリタクンダ (*Amṛtakuṇḍa*)』と題される書に源をたどられる『カールマーパンチャーシカー (*Kāmarūpañcāśikā*)』の翻訳とされるアラビア語訳・ペルシア語訳 (KP)¹⁾、『生命の水槽 (*Hawḍ al-Hayāt*)』と題されたアラビア

* 本研究は、科学研究費補助金 基盤研究(C)25370066による成果である。

* 本文中、原典中のサンスクリット語のアラビア・ペルシア語文字での音写は大文字表記、術語としてのサンスクリット語はイタリック表記とする。

1) ここでは Ms. Persian No. 20, Vatican Library, ff. 56 を使用する。このテキストの伝承については [Sakaki 2005: 138] 参照。当初、この書名を *Kāmarūbijākṣā* (The Kamarupa Seed Syllables) と読

語訳 (HĤA)・ペルシア語訳 (HĤP)²⁾をとおしてイスラーム知識人の知るところとなり、16世紀には、インドのシャッターリー教団の導師、ムハンマド・ガウス・グワーリヤーリー (Muḥammad Ghawth Gwāliyārī d. 1562/3) の著した『生命の海 (*Baḥr al-Ḥayāt*)』(BH) によって、より広くイスラーム世界に普及することになった。既に述べたように [榊 2000, 2005], KP に含まれるナータ派ヨーガの行法と呼吸のあり方にもとづく占術 (*svarodaya*) [榊 2004: 134-135] は、イランで著されたペルシア語の百科事典『諸学の宝 (*Nafā'is al-Funūn*)』(1342) に引用され [Ernst 2011: 133-135], インドでは16世紀半ばにデカンで編まれた百科事典『フマーユーンに捧げた知識の宝石 (*Jawāhir al-'Ulūm Humāyūnī*)』(c. 1554), さらに『サーディクの証言 (*Shāhid-i Šādiq*)』(1646) にも引き写されることになった。

ナータ派ヨーガの体系が採用した修道法のルーツはかなり古い時代までさかのぼることができようが、祖師ゴーラクナートに帰される『ゴーラクシャシャタカ (*Gorakṣaśataka*)』(GŚ) に示されたその教えは、他のナータ派関連サンスクリット文献からの引用と共にペルシア語に翻訳された。現在、ハタ・ヨーガの権威ある書として扱われている15世紀半ばにスヴァートマーラマ (Svātmārāma) に編まれた4章からなる撰文集『ハタブラディーピカー (*Hathapradīpikā*)』(HP) や『ゲーランダ・サンヒター (*Gheraṇḍasamhitā*)』などの伝える行法も、後にペルシア語のアンソロジーに編み込まれることになった。

スーフィーたちはヨーガ行者たちから何を学んだのであろうか。その手がかりを、タントラ・ヨーガの存在を広く世界に伝えたジョン・ウッドロフまたの名をアーサー・アヴァロン (Sir John George Woodroffe or Arthur Avalon d. 1936) という英国人オリエントリストの記述に求めてみよう。東ベンガルのタントリスト、シヴァチャンドラ・ヴィドゥヤールナヴァ (Śivacandra Vidyārṇava) に弟子入りしたと言われる弁護士で、インド研究者・美術鑑定家でもあった彼は、その主著『蛇の力 (*The Serpent Power*)』(1918) で、16世紀にプールナーナンダ (Pūrṇānanda) に著された『6つのチャクラの解説 (*Ṣaṭcakranirūpaṇa*)』を英訳して解説することで、ヨーガの瞑想法におけるチャクラの考え方を広く知らしめた [Taylor 1996]。

『蛇の力』でウッドロフは、チャクラに類似する考え方をイスラーム文献に見出したとして、次のように紹介している。

ヨーガは二つの理由でタントラ的であるといわれる。チャクラ (中枢) に言及するヨーガ・ウパニシャッドや諸プラーナ文献のいくつかにはそれは見出される。ハタ・ヨーガに関する論放も同じ主題を扱っている。さらに、おそらくは借用された場合もあろうが、インド以外の (宗教) 体系の中にも同様の考えが見られる。この中にはムハンマド・

²⁾ んでいた Prof. Carl Ernst [Ernst 2003] がこの読みに共通理解を示して下さり、自ら翻訳も加えた [Ernst 2013] サヌースィーのアラビア語テキストも快く複写させて下さったことに感謝する。

2) ここでは Ms. Majmū'a 2 (Cat. No. 4435), Salar Jung Museum Library, ff. 12b-31a を使用する。

ダーラー・シュコーによる『神への導きの書 (*Risālah-i Haqq Numā*)』がある。そこでは「神の使徒の隠されるべき教え」として3つの中枢について説かれる。それらは「脳の母 (Mother of Brain)」あるいは「球体の心 (*dil-i mudawwar*)」, 「松毬の形をした心 (*dil-i šanaubarī*)」そして「蓮の形をした心 (*dil-i nilūfari*)」である。[Woodroffe 2001: 2] ウッドロフが、ダーラー・シュコー (Dārā Shukoh d. 1659) の著したスーフィー修道論における「3つの中枢」をチャクラの観念に関連するととらえたことは卓見である。なぜなら当時のイスラーム知識人たちは、念想の対象となる微細な身体におけるチャクラに関する知識をもっていたし、それに関連して3つの「心」という表現を用い、それをスーフィーの修道論に適用していたことを翻訳文献が証明してくれるからである。

本稿では、ヨーガの瞑想実践法の核であるチャクラ論をとりあげ、この考え方がどのような形でスーフィーへと伝わり、どのように解釈されていったのか、サンスクリット語からアラビア・ペルシア語への翻訳・翻案文献を通して検証する事を目的とする。まずウッドロフの注目したダーラー・シュコーの著した論攷の文脈を検討し、同時代のペルシア語文献に示されるチャクラ論を紹介する。そしてチャクラの瞑想法を初めてイスラーム世界に伝えた『アムリタクンダ』の役割をアラブ世界のスーフィー教団論を用いて示し、さらにダーラー・シュコーに先行する時代に著されたヨーガの実践に関連するペルシア語への翻訳・翻案文献に現れるチャクラ論から、3つの「心」が何を示すものであったのかを明らかにする。

I ダーラー・シュコーの時代のペルシア語文献に示されるチャクラ論

1 瞑想の場所としての3つの「心」とチャクラ論

ウッドロフが注目した論攷を著したダーラー・シュコーは、サンスクリット古典のアラビア・ペルシア語への翻訳史において、50のウパニシャッドを『大いなる秘密 (*Sirr-i Akbar*)』(SA) と題してペルシア語訳させたことで名高い。この中にはヨーガ系ウパニシャッド文献も含まれ、そこには古典ヨーガやハタ・ヨーガの知識が編み込まれている。さらに、ヒンドゥーのパンディットらを通して学んだ叙事詩やプラーナ文献の知識を基礎に、『ヨーガヴァーシシュタ (*Yogavāsiṣṭha*)』(実際は要約された『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ (*Laghuyogavāsiṣṭha*)』)などのペルシア語訳にも携わり、シヴァ教やヴィシュヌ派の聖者たちとも交流をもち、対談の記録にもその知識が披露されている。

一方で、ムスリム聖者伝やスーフィー詩人たちの作品を読破し、自らカーディリー教団の導師ミヤーン・ミール (*Miyān Mīr* d. 1635) に弟子入りし、ムッラー・シャー (*Mullā Shāh* d. 1661) を直接の導師としてスーフィーの仲間入りをした。先行するさまざまな聖者伝に基づいて『聖者たちの船 (*Safīnat al-Awliyā'*)』(1640) を著し、107人の聖者たちのことを『聖者たちの美徳 (*Hasanāt al-Ārifīn*)』(1652) にまとめた。自らの師を含めた聖者たちの業績を著した『聖者たちの静寂 (*Sakīnat al-Awliyā'*)』(1642) からは、彼自身がさま

ざまなスーフィー教団の修道法に通じた実践者でもあったことがよくわかる。こうした知識の集積と修道体験が、主著『二つの海の交わるころ (*Majma‘ al-Bahrayn*)』(MB) (1655) に結実した。

ウッドロフの言及した『神への導きの書』(RHN) (1646)³⁾は、イブン・アラビー (Ibn ‘Arabi d. 1240), アフマド・ガザーリー (Aḥmad al-Ghazālī d. 1123/26), イラーキー (Fakhr al-Dīn ‘Irāqī d. 1289) やジャーミー (‘Abd al-Raḥmān Jāmī d. 1492) などの著した古典的スーフィー文献を読んだ上で著されたとされる、スーフィーの修行階梯と行法に関する論攷である。全6章からなり、スーフィー道においてナスート界 (‘ālam-i nāsūt), マラクート界 (‘ālam-i malakūt), ジャバルート界 (‘ālam-i jabarūt), ラーフート界 (‘ālam-i lāhūt) そして本質世界 (‘ālam-i huwīyat) と呼ばれる段階を経て行者の精神的深化が進んでいき、それぞれの段階で獲得される叡智が説かれている。

問題の3つの「心」は、ナスート界を論じた第1章に登場する。修行の最初の段階での念想の対象として、身体内部の3つの場所がこれらの名称で示されている。

ナスート界すなわちこの知覚世界は、人によっては直観世界 (‘ālam-i shahādat), ムルク界 (‘ālam-i mulk), 思考世界 (‘ālam-i pandār) や覚醒世界 (‘ālam-i bidārī) とも呼ばれるが、実在者 (神) との近侍と完全なる喜びがある究極の段階としての世界である。友よ、このナスート界で苦しむ人が神を求めるなら、第一に、人気のない静かな場所に一人で行って、尊敬するファキールの姿や、契りを結んだ (神への) 愛に献身する人の姿を思い浮かべるべし。その観想法は次のとおりである。眼を閉じて、精神集中して、心の眼で観照する。友よ、このファキール (著者) によれば、「心 (dil)」は3つの場所にある。一つは、左の乳の下の胸の内奥にある。それを「松毬の形をした心」と呼ぶ。なぜならそれは松毬の形をしているがゆえに。この心は人間も動物も皆もっている。

(二行詩)「人間の心臓の形をしたものは、肉屋の店先にたくさんある。」

だが、その意味は、選ばれた人々には特別なものである。次は、脳天 (umm al-dimāgh) にあり、それを「球体の心」と呼ぶ。また「無色の心 (属性をもたない心 dil-i bīrang)」とも呼ぶ。その特質は、この心に集中している時にはいつでも、危難が彼にふりかかることはないということである。なぜなら危険がそこに入り込む余地がないからである。次の心は尻の真ん中にあり、それを「蓮の形をした心」と呼ぶ。観想するときは、先に「松毬の形をした心」で述べたように集中する。この念想においては心の眼で似姿を観照することから、似像世界 (‘ālam-i mithāl) とも呼ばれる。この念想は、マラクート界を開ける準備である。マラクート界とは別のものなので、似像世界と呼ば

3) *Risālah-i Haqq Numā* (RHN) には多くの写本が残され、石版本も出版され [RHN 1896], 英訳もハタ・ヨーガ関連のサンスクリット・テキストを幅広く英訳して出版していたバンディットによって早くになされた [Vasu 1912]。新たな校訂本が出されたわけではないが、近年、新しい英訳が出版された [Kugle 2012: 129-164]。

れるのだ。マラクート界の中に似像世界があるのではない。友よ、先に述べたやり方で念想を深めていくと、(念想対象の)イメージと念想とが一致してくる。そしてマラクート界が開く原因となる。このイメージが汝の眼に明らかになると、めでたく似像世界が汝に開く。そしてこの行に何度も従事すれば、今まで見たことのなかった諸々のイメージのどれも汝に隠されることはない。[RHN: 6, 7]

ダーラー・シュコーはMB 7章で、スーフィーの修行階梯におけるこれらの精神的深化の過程すなわちなースト界、マラクート界、ジャバルート界、そしてラーフト界を、インド人によってウパニシャッド聖典の時代から説かれてきた覚醒状態 (*jāgrat*)、夢眠状態 (*svapna*)、熟睡状態 (*suṣupti*)、そして第四位 (*turiya, turyā*) という人間の4つの意識状態 (*avasthā*) に相応するものにとらえている [MB: 45-47, 89-91]。ダーラー・シュコーとラーマナダに連なるヴィシュヌ派の一派を率いたバーバー・ラル (Bābā Lāl) との対話でも、心の働きを論じる箇所、これらのうち最初の3つの意識状態 (覚醒、夢眠、熟睡状態) が生類の心の在り処であるとバーバー・ラルは説いている [Massignon 1926: 310]。SAでも、『カイヴァルヤ・ウパニシャッド (*Kaivalya-upaniṣad*)』17、『サルヴァ・ウパニシャッド (*Sarva-up.*)』1、『ヌリシンハ・ウパニシャッド (*Nṛsimha-up.*)』2.2などで、同様の解釈が示される [SA: 345, 377, 471]。

一方、チャクラへの言及はヨーガ系ウパニシャッドのペルシア語訳にみられる。『ハンサナーダ・ウパニシャッド (*Haṁsanāda-up.*)』4では、第1のチャクラは尻に、第2のチャクラは臍の下生殖器官に、第3のチャクラは臍に、第4のチャクラは心臓の内部に、第5のチャクラは喉に、第6のチャクラは両眼の間にあるとしている。『ヨーガ・シカー・ウパニシャッド (*Yogasikhā-up.*)』2.3では「脳天にはブラフマンの世界 (*Brahma-loka*) がある」と表現され、『ヨーガタットヴァ・ウパニシャッド (*Yogatattva-up.*)』141では「体内のナーダ (音) は両手を使って目や耳をふさいで脳天に念想することで聞こえてくる」 [SA: 385, 387, 442] とある⁴⁾。ここでは、3つの「心」すなわち「球体の心」、「松毬の形をした心」そして「蓮の形をした心」という表現はみられない。

ダーラー・シュコーと同じ時代、イスラームに改宗したゾロアスター教徒とされるモーベド・シャー (Mobed Shāh) 別名ズルフィカール・アルディスターニー (Zū al-Fiqār Ardistānī) (d. 1670) によって著された宗教百科『諸宗派の学院 (*Dabistān-i Mazāhib*)』 (*Dabistān*) は、ペルシア人、特に自らの属するパールシー教徒の中のアーザル・カイヴァーン派、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒と、インド人の宗教伝統諸派のさまざまな見解を紹介している。「インド人の見解」では、スマールタ (*smārta*) として知ら

4) ヨーガの実践法に詳しい『ヨーガタットヴァ・ウパニシャッド』のペルシア語訳では、1, 2, 132 以下しか翻訳が残されていない。ナーダ音の観想法は先の RHN 2 章でも詳細に説かれ、MB 8 章でも重要な行として取り上げられる [榊 1999]。先の3つの「心」への言及を含めてハタ・ヨーガとの関連性は Davis によっても指摘されている [Davis 2005: 303-316]。

れるプールヴァ・ミーマーンサー (pūrva-mīmāṃsā), プラーナ論者, ヴェーダーンタ, サーンキヤ, ヨーガ, シャークタ, ヴァイシュナヴァ, チャールヴァーカ (唯物論者), タールキカ (論理学派) と呼ばれる諸派と, ジャイナ教徒, シク教徒の見解が解説され, このうちヨーガ派とシャークタ派の解説で, チャクラの考え方が示される。

ヨーガ派の見解では, ヨーガの8支を解説した後, JWGYH (jawgīyah) について, JWG (yoga) とは SHNSKRYT (*saṃskṛta*) 語で「結びつけること」を意味し, 神を ALK (*alakh*) と呼び, ゴーラクナートを信奉し, 息の保持を重視することなどを述べた後, 息を保持するために知っておくべきこととして「尻から脳天までに7つの階位」があり, それらが「SPT CKR (*saṭta-cakra*)」と呼ばれるとして7つの階位 (pāyah) としてのチャクラを解説する。

第1の段階 (martabah) は肛門で, 4つの花卉をもつ (蓮の) 花の如くであり, それを MWLADHAR (*mūlādhāra*) と呼ぶ。その中央に男性の源があり, それをインドの言語では MNDR (*mandara*), アラビア語では陰茎 (zakar) と呼ぶ。これは第2の段階である。第3の階位は臍であり, その真ん中を火の脈管が通っている。それをインドの言語で NAB CKR (*nābhi-cakra*) と呼ぶ。第4の段階は心臓であり, それをインドの言語では MN PWRK (*manipūṛaka*) と呼ぶ。それは12枚の花弁をもつ (蓮の) 花の如くである。第5の段階は咽喉であり, それをインド人は KNT (*kanṭha*) と呼ぶ。第6の階位は眉間でありそれをインドの言語では BHNW (*bhrū* あるいは *bhrūva*) と呼ぶ。第7の段階は脳天すなわち頭の中央であり, それをインドの言語では BRHMAND (*brahmarandhra*) と呼ぶ。[Dabistān: 160]

一方, シャークタ派の見解の解説では, この世界を生みだした者はマヤー・シャクティ (*māyā śakti*) と呼ばれる女神であり, その DYWY (*devi*) すなわち精霊 (*rūhānīyah*) が, あらゆる生類において ShT CKR (*ṣaṭ-cakra*) と呼ばれる6つの輪 (*dāyirah*) の中に存在しているという。それは蓮の茎の細い糸のようなものとされる。それらの6つの輪とは以下のようなものである。

第1は MWL ADHAR すなわち尻, 第2は MN PWRK すなわち臍, 第3は SWADSTHAN (*svādhiṣṭhāna*) すなわち堅固で強い場所であり, その上に臍がある。第4は HRDY (*hrdaya*) すなわち心臓である。第5は SDH (*viśuddha*) すなわち浄められたという意味であり, 神聖で清らかな胸の上部から喉の輪の所まで (の場所) である。第6は AKNYA CKR (*ājñā-cakra*) すなわち火の輪という意味でそれは眉である。以上が6つのCKRであり, その上には ANDRA (*randhra*) がある。すなわち魂の窓であり靈魂の孔であり, それは頭頂すなわち頭の中央にある。その場所には千枚の花弁を持つ蓮の花がある。ここは欺く DYWY すなわち世界を欺く貴婦人の住処であり, この場所に本来の美しい姿をして休んでいる。[Dabistān: 167]

Dabistānの著者は, HPもGSも『アムリタクンダ』の翻訳としての『生命の水槽』も読んでいたと述べている [Dabistān: 162]。それらの知識が, ここで説かれたチャクラの説明に

反映されているのである。だが、ここに3つの「心」についての言及は見られない。

2 スーフィーの一派に並び称されたヨーガ行者たちの実践法とチャクラ論

チャクラ論を、様々なスーフィー教団のズィクルの行法と並べてアラビア語で紹介したのは、アルジェリア生まれでリビアにおける19世紀イスラーム復興運動の旗手サヌースィー (Sayyid Muḥammad ibn 'Alī al-Sanūsī d. 1859) であり、『40の教団における清らかな泉 (*al-Salsabil al-Ma'in fi al-Ṭarā'iq al-Arba'in*)』にチャクラへの念想法とその果報が説かれている。

近現代のスーフィー教団の歴史を研究したトリミンガムは、シャッターリー教団の導師、ムハンマド・ガウス・グワーリヤーリーを紹介する中で、この書に言及し「極端な苦行や禁欲主義、そして肉食主義など多くの実践行をヨーギンたちから受け継いだ」と述べている [Trimingham 1998: 98]。ヨーガ行者たちは、近代インド語では「ジョーギー (Jogi)」と呼ばれるが、アラビア・ペルシア文字では JWJY (jawji, jūji or joji) や JWGYH (jawgiyah or jogiyah), あるいはサヌースィーによるアラビア語表記のように JWJYYT (jawjiyat, jūjiyat) と表記された。サヌースィーの伝える JWJYYT の教えと行法を少々長くなるが紹介してみよう。

ズィクルのための彼らの座法は、他の行者たちと同様に足を組んで座る。ただ異なるのは、ズィクルにおいて頭を空の方に挙げてズィクルを一万回またはそれ以上の回数唱え、それによって空中浮揚能力を獲得することにある。その(ズィクルの)ことばは WAHY と 'AWHY である。

次のことを知るべし。JWJYYT の修行 (sulūk) では、修行者 (sālik) が必ずそれを身に着けてから想像力 (wahm) をはたらかせて行をおこなうという3つの事柄が前提条件とされる。第1は座法で、それには84種ある。そのうち最も重視されるものは足を組んで座り、左足のかかとを2つの精巢の下に置き、右足をその近くに置いて、肛門を閉じ、唇を閉じて、舌を口(内)の上方につけてから念想を行い、内的な観想に専念するものである。第2の前提条件は食物の節制⁵⁾である。第3の前提条件は睡眠をできる限り控えることである。修行者がこれらの3つの事柄を根気よく実践すれば、行に専念することができるようになり、それを征服して目的を遂げる。

息には3種あることを知るべし。上に昇っていく息と、下に(降りていく)息と常に身体の中をめぐる息である。血液はそれと共に四肢全体を流れ、神の望まれるままに、四肢を血液が流れて麻痺することなく損なわれることはない。血液の流れが止まると、その時、身体の中のどの部分も麻痺し活動しなくなる。呼吸過多は食べ物から生じる。呼吸(の数)を少なくしたいのならば、米や牛乳のような食べ物を選ぶようにして、肉やそ

5) 原文は謙遜 (khshū) となっているが jū' と読む。第3に「眠らないこと」をあげるならば、「食事の節制 (*mitāhāra*)」つまり『生命の水槽』第4章にあるように「過度に食べないこと (jū)」 [HHA 323] を併記すべきで、おそらくは誤植であろうと考えられる。

れに類するものを抑制するべし。下に降りていく息は保持するべきであり、必要以外は呼吸をしないようにするべし。息を保持することの大きな利点は、第1に身体の健康、第2に長寿、第3に白髪や老いという虚弱に悩まされないことにある。息を保持すること (qabḍ al-anfās) は、彼らの術語で「生命の水 (mā' al-ḥayāt)」と言われる。もし息を吐き出したと思うときは、夜明け前に、先に述べた座り方で座る。息を制御することなく呼吸をするなかれ。そうすれば、数え上げたり記録したりするものに属さないものを見る。

もしも、隠された世界を見たいと願うならば、両眼を鼻先に据えるべし。そして舌を動かすことなくアッラー、アッラーということばを心の中で思いおこすべし。もしもこの行に習熟したなら、その時、魔法も毒も彼には影響を与えることはない。病気にかかることもない。そして隠された諸世界を明らかにし、願いがかない敬虔なる行為をなすと人々の間で有名になる。

次のことを知るべし。瞑想や念想する場所は7か所ある。第1は尻、第2は陰茎の中央、第3は臍の中心、第4は松毬の形をした心臓、第5は喉、第6は2つの眼、第7は脳天である。それは針の穴のような眼に見えない小さな孔である。頭に油を塗るとその穴が油を吸い寄せ、油は穴の方へと流れる。幼い時にはその場所は湿っていて柔らかい。これは観想する場所のうちで最も優れた場所である。また(神の)近侍に最も近い場所である。そしてその行がしっかりできるようになれば目的をとげる。

次のことを知るべし。果報はすべて想像力のなせるわざであり、それは心の作用であり、何者にも打ち勝たれることはない。もしも誰かがこの意味を理解したならば、即座に一切の目的を遂げるだろう。もしも修行者が想像力を離れて隠された世界を直接に見たいと望むなら、念想や瞑想に関連した7つのことばを観想する必要がある。瞑想状態にあるとき、その念想に特有なしるしが出現する。

第1に思いを凝らすことを尻から始める。そして彼の思念をそこに集中する。瞑想状態にあって、次の HW'AM ということばを唱える。その意味は「寛大なるお方 (al-jawād)」であり、(その色は)土星の黒である。その特性は自然に(神の)命令を直観することである。第2は陰茎と2つの精巢の間に念想することである。そして瞑想状態にあって AW'AM と唱える。その意味は「全能者 (al-qadir)」である。(その色は)火星の赤色である。その特徴は真理を獲得することである。心の中に思いが生じる時、心の中に思うことが正しいことであれ不正なことであれ、そのように実現する。第3は臍の中央である。瞑想状態にあって、心の中で RHYN と唱える。その意味は「全知者 (al-'alīm)」⁶⁾である。(その色は)木星の煙色である。その特性は神から直接

6) 原文は 'im となっているが、'alīm と読む。HHA, HHP では khāliq であるが BH では 'alīm を併記していることからこの読みに準じる [BH 40]。

与えられる直観智と地に隠れることを獲得することである。第4は左の胸の下に念想することである。心の中で NSRYN と唱える。その意味は「生けるお方 (al-ḥayy)」である。(その色は) 太陽の黄色である。その特性は隠されたものを手に入れることである。ついには隠された世界が彼の前で目に見える世界のようになる。この念想をなす者は、現に目に見える世界のように隠された世界を目の当たりにし、他人が考えていることもわかるようになる。第5は喉の場所への念想である。そして心の中で A'i と唱える。その意味は「意欲あるお方 (al-murid)」である。(その色は) 金星の白である。その特徴は、征服することであり、高さも低きも彼に服従する。この念想をなすものは高さも低きも一切世界を征服しそれを支配する。第6は両目の間すなわち額に念想することで、心の中で BRHM と唱える。その意味は「正義のお方 (al-muqṣit)」である。(その色は) 水星の青色である。このズィクルをなす者は、誰からも教えられることなく物事の真理を明らかにする。第7は脳天の上方にある場所に念想すること、すなわちここに思念を集中することである。心の中で HNSA' と唱える。その意味は「話し手 (al-kalim)」である。(その色は) 月の緑色である。その特性は、苦行によることなく神の賜物として物事の真実についての秘密を手に入れることである。この念想をなす者は、預言者ヒズル (エリア) のように永遠の生命を手に入れる。そして求道者 (ṭalib) たちにとってこの観想は、あらゆる願いをかなえる諸々の観想の中で最も優れたものである。

[Sanusi 1989: 84-87]

この情報はどこから伝わったものなのであろうか。7つの場所への念想はどんな意味をもっているのであろうか。それはチャクラ論を最初にイスラーム世界に紹介した『アムリタクンダ』の伝播にかかわるのである。

II サヌースイーに伝えられた7つのチャクラへの瞑想法

I 『アムリタクンダ』の伝承における7つのチャクラ

サヌースイーの伝えた JWJYYT と呼ばれる人々の行法は、いかなる情報源によるものなのだろうか。ここに示される行法の大半は、アッサムのカーマルーパからやってきたヨーギンが伝えたというタントラ・ヨーガの実践法を示す『アムリタクンダ』の翻訳文献群に含まれている。

サヌースイーの伝える行法のそれぞれを検討していくことにしよう。

冒頭に記される「足を組んで座り」は HHA 4 章の最初の座法で説かれる [HHA 323]。ズィクルにより「空中浮揚能力を獲得する」は4章の5番目の座法の果報として示されている [HHA 325]。ヨーガの修行者に不可欠な実践行の第1とされる座法について84種あることは、「水や土でいっぱい皮袋のような肉体」を浄化するために84種の座法があると説かれることに合致する [HHA 323]。不可欠な実践行の第2の食物の節制と第3の眠りの節制

に関して、HHA では苦行をする際の条件として、過度の食欲をもたないこと、人々から離れて独居すること、動物に危害を加えられないような場所に住むこと、さらに行を始める季節は夏や冬で、終わるのは秋や春にすること、行を行う時間を決めることが勧められる [HHA 323]。BH 9 章冒頭では、睡眠をできるだけ少なくすることも、食事を減らすことなどと共に苦行 (riyāḍat) の中に含まれると説く [BH 55]。

息の3種とは HHA 5 章に、「息は3種で浄化のために上昇する息と、浄化のために下降する息」と「身体全体に血液を循環させる息」とあることから、プラーナ (*prāṇa*)、アパーナ (*apāna*)、ヴィヤーナ (*vyāna*) と呼ばれる生気をさしていると考えられる。だが、体内の気を外に吐き出す呼気と、外から内部に取り込む吸気と呼吸を制して保持されている状態にある体内の気を示していると解釈することも可能であろう。息の活動は「寿命を延ばし」「食物なくしては生まれぬ」と説かれ、食物も「牛乳と共に煮た米のようなものあるいは小麦からなるものがよく、必要以外は肉や油を食べるなかれ」と説かれていることに一致する [HHA 325]。

「隠された世界を見たいと願って鼻端に両目の視線を据えて舌を動かすことなく念じる行」は、トラータカ (*trāṭaka*) と呼ばれる脈管 (*nāḍī*) の浄化法の一つを示している。これも HHA 2 章にある、隠された世界に至りそこにあるものを見たいと願うなら、両眼の黒目を鼻筋に寄せて「偉大な名 (*al-ism al-a'zam*) である「彼は神なり (*hū allāh*)」と心の中で唱えるという行法をさす [HHA 319]。

身体内の7つの場所への観想法については、HHA 7 章に説かれる「想像力の特性を知ること」の内容と一致する。サヌースイーの示す観想する場所、色、支配する惑星、唱えるべきことば、得られる果報の記述は、HHA で説かれる観想する場所、思い浮かべる惑星や色、果報と違いはない。第7の脳天に関して、「針の穴のような目に見えない小さな孔」であり「頭に油を塗るとその穴が油を吸い寄せ」という表現は HHA にはみられないが、KP に類似の表現がある (f. 19b)。唱えるべきことばとその意味として示される神の美名に関しては、写本により異読が多くみられることもあって完全な一致を見ることは難しいが、サヌースイーの記述と HHA、HHP そして BH とを比較してみるとほぼ一致した内容を伝えていることがわかる。GS, HP などと比べてみると、これらが7つのチャクラにおける観想法を示していることは間違いない。

サヌースイーが「息を保持することが『生命の水』と呼ばれる」と述べているのは、息を保持することの果報が「生命の水」であることを示す。HHA 8 章では、「死の兆候」を知るための方法とその兆候を排除するための念想が説かれるが、7つのチャクラにおける観想法は、死の予兆が現れたときそれを鎮静するために用いられる。すなわち想像力を働かせて、下から順に7章で述べたそれぞれのチャクラを象徴する図形を念想しつつ7つの場所に7つの呪文を念じると、「7つの形が一つになってそこから精液のような水が滴り落ちる」というのである。BH 8 章では「生命の水 (*āb-i ḥayāt*) が降ってくる」と表現している [BH 54]。

このように、サヌースイーの伝えた情報の大半は、『アムリタクンダ』の伝承に含まれたタントラ・ヨーガの行法であり、そこに7つのチャクラにおける念想法も含まれているのである。

2 シャッターリー教団のズィクルに受容された瞑想法

サヌースイーが伝えたヨーギンの行法にいくつか未解決の記述が残されている。「頭を空の方向に向けて一万回またはそれ以上」唱えるというズィクルの回数、また「WAHYと'AWHY」と唱えるというズィクルの文句は、HHAやHHPには記されていない。そこでは座法を行じつつ「彼は神なり hū allāh」と唱えることのみが説かれる。だが、BHを含むシャッターリー教団の教理・修道論にその痕跡を見ることができる。

イスラームにおいて、ドゥアー (du'ā) と呼ばれる個人的祈願は、もともとはバスマラ (basmala) 「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」(bism-i al-lāhi al-raḥmān al-raḥīm)、タフリール (tahlīl) 「アッラーのほかには神的存在はいない」(lā ilāha illa al-lāhu) やタクビール (takbīr) 「神は偉大なり」(al-lāhu akbaru) をはじめとして、神や精霊の名前、導師らに伝承されてきた祈祷の文句などからなる連続祈祷が加えられて形が整えられていった。こうした一連の祈祷文 (awrād) やことばは、何回唱えるのか、声に出すのか心の中で唱えるのか、身体の特定の場所に意識を集中して打ち付けるように唱えるのかなど身体的動きを伴う場合も含め、祈祷書や修道論にまとめられていった。

祈祷文の集成の代表的なものとしてムハンマド・ガウス・グワーリヤーリーの『五つの宝石 (*Jawāhir al-Khamsa*)』(1549) がある。もともとアラビア語で著されペルシア語訳されて広まったものだが、ジャウハル・シャリーフ (Ja'far Sharif) あるいはラーラー・ミヤーン (Lālā Miyān) と呼ばれる人物に帰される『イスラームの規律 (*Qānūn-i Islām*)』というダカニー・ウルドゥー語で書かれた論攷の26章に魔術 (sīmiyā) の一つとして紹介され [Herklots 1972: 229-231]、さらにサヌースイーの著作にも引用されている。『五つの宝石』4章の「シャッターリー教団の行法」に紹介されるインドの言語によるズィクルには、チシュティー教団の導師、ファリードゥッディーン・ガンジュ・シャカル (Farid al-Dīn Ganj Shakar d. 1265) によるとされる「ahūnih hūn ahūnih tūn ahīn tūn」のみが示されている⁷⁾。さらにミール・イマームッディーン (Mīr Imām al-Dīn) の著した『シャッタールのやり方 (*Munāhij al-Shattār*)』でも、hūn, awhī hī hūn awhī hī awḥan tan ay hīn tūn īn hān tūn hūn hūn というマントラに類似したズィクルの文句が挙げられている [Qadiri 1996: 133-34]。

一方、ズィクルにおける念想場所は、シャイフ、バハーウッディーン (Bahā' al-Dīn d. 1515/16) によって著された『シャッターリー教団論 (*Risālah-i Shattāriyah*)』4章に、ヒンドゥーのズィクルとして「まず心臓の方に hūn, 空の方に tūn と2回、心の中で hūn, 天空に tūn あるいは右側に tūn, 心臓の方に ūn hān tūn, 左側に ay hān tūn それから心臓の方

7) *Jawāhir al-Khamsa*, Ms. Ethe 1875, India Office f. 223a.

に *ûn hân*, 天空に *ûn hân tûn* そして心臓の方に *in hân tûn* と打ち付ける」というやり方が説かれる。ここには、スーフィー道の精妙体 (*latîfa*)⁸⁾ の考え方が反映されている。さらにムハンマド・ガウスは、アラビア語のアルファベット 28 文字と天体の 12 宮、7 惑星、4 元素との間に秘儀的な意味を持たせてズィクルの行法に応用したり、BH 9 章では、女神たちに対するマントラにイスラームの預言者や精霊たちの名前を編み込んでもある [BH 59-63]。

エリアーデはスーフィーのズィクルを取り上げて、ガルデ (Louis Garde) がズィクルと念誦ヨーガ (*jaḥayoga*) および念仏禪との関係を考察したこと、スーフィーの精妙体論やこの実践に伴う視覚的聴覚的顕現などを紹介してから、ズィクルにおける座法や呼吸法が部分的にインドの影響を受けていると述べるにとどめた [エリアーデ 1975: 30-33]。だが、ムハンマド・ガウスがヨーギンをインドの修道僧 (*rāhibān-i hind*) と呼び、「彼らの靈感はイスラームの求道者らの境地 (*ḥāl*) と一致している。表現は異なっても説明は同じである」 [BH 37] と述べているように、スーフィー自身が自分たちの行法であるズィクルとヨーギンの観想法の近似性を感じ取り、現に表現も受容していたのである。

『アムリタクンダ』の翻訳文献群が、チャクラが種字や聖なることばを伴って祈願を行う観想法の装置として機能することを伝え、シャッターリー教団のようにスーフィーがその働きを実践行に適用していたことは明らかになった。だが、ダーラー・シュコーが言及した 3 つの「心」とチャクラの関係はまだ判明していない。

Ⅲ ナータ派ヨーガの翻訳・翻案文献に現れるチャクラ論と 3 つの「心」

Ⅰ スーフィー・シャリーフとその翻訳活動

『アムリタクンダ』と呼ばれた文献のアラビア語・ペルシア語訳文献群は、確かにチャクラ論を伝えたが、呼吸のあり方による占術部分を除いては『アムリタクンダ』の原典は同定されていない。ここで目を向けたいのは、ダーラー・シュコーの時代に先行して著された、ナータ派ヨーガ関連の現存するサンスクリット語文献群のペルシア語訳である。それらはスーフィー・シャリーフと自称する人物の残した諸論攷である。皇帝ジャハーンギールに捧げられた『ヨーガヴァーシシュタ・サーラ (*Yogavāsiṣṭhasāra*)』の訳者は、スーフィー・シャリーフ (*Ṣūfī Sharīf Qubjahānī* あるいは *Khūbjahānī*) [Marshall 1967: 453, 454] と自称している。彼については、出自に始まりいかなるスーフィー教団に属していたのか、いかな

8) ルーツを 10 世紀のスーフィー、ジュナイドにまでさかのぼるとも言われる微細な身体の中核としての精妙体論は、心 (*qalb*) 右胸の下部にある霊 (*rūḥ*)、左胸上部にある秘 (*sirr*)、右胸上部にある玄 (*khafī*)、脳にある魂 (*nafs*)、臍の下にある玄奥 (*akhfa*) と呼ばれる微細身の中核に、それぞれの特性を示す色、預言者、唱えるズィクルのことばが配当される行法である。ナクシュバンディー教団の精妙体論については中田 1995: 211-214, 248-251; Buehler 1998: 98-130 参照。インド・スーフィーによる修道論に見られる念想法 [二宮 2014: 167-173] については、精妙体論とあわせて検討を加える必要がある。

る師についたのかなど、伝記的なことは何もわかっていない。

『ヨーガヴァーシシュタ』は、『マハーラーマヤナ (*Mahārāmāyana*)』、『ヴァシシュタ・ラーマヤナ (*Vasiṣṭharāmāyana*)』あるいは『ヴァーシシュタ (*Vāsiṣṭha*)』などとして知られる全6篇32000詩節からなる大部な聖典である⁹⁾。この縮約本の一つは、カシュミールのパンディット、アビナンダ (*Abhinanda*) によって『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ』として同じく全6篇6000詩節にまとめられた。ペルシア語訳『ヨーガヴァーシシュタ』の多くはこれに基づいている。

『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ』のペルシア語訳には、皇帝アクバル時代のものとしてファルムッリー (*Farmullī*) あるいはハビーブッラー (*Habibullāh*) に帰される訳¹⁰⁾、王子サリーム (後の皇帝ジャハーンギール) の命令でニザームッディーン・パーニパッティー (*Nizām al-Dīn Pānipattī*) によって訳されたもの、ダーラー・シュコーの命で訳されたもの (PYV)¹¹⁾、そして近世イランの哲学者モッラー・サドラー (*Mullā Ṣadrā* d. 1535/36) の同時代人であるアブル・カースィム・フィンディリスキー (*Mīr Abū al-Qāsim Findiriskī* d. 1640) によってパーニパッティーの訳に対する注釈と語彙集や撰文集 [Mujtabai 2006] など改訳と縮訳を重ねられた歴史をもつ。ペルシア語訳『ヨーガヴァーシシュタ』が、同時代のインドのムスリム知識人たちに広く読まれていたことは、そこに含まれる逸話が皇帝アクバル時代の宮廷詩人ファイディー (*Faiḍī Abū al-Faiḍ* d. 1595) あるいはアブル・ファズルに帰される『叡智の閃光 (*Shāriq al-Ma'rifa*)』や *Dabistān* に紹介されていることから知られる。

この『ヨーガヴァーシシュタ』のエッセンスを集めた『ヨーガヴァーシシュタ・サーラ』のペルシア語訳をしたのがスーフィー・シャリーフとされ、ダーラー・シュコーは自らが携わった『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ』のペルシア語訳の前書きで、過去の翻訳は求道者のためにならないとして、自らの手で改めて訳させようとした動機の一つが、シャイフ・スーフィー (スーフィー・シャリーフ) に帰されるこの翻訳を読んだことにあったと述べている [PYV: 3, 4]。さらに、*Dabistān* の著者も、カシュミールのバラモンが著した『ヨーガヴァーシシュタ』の撰文集がムッラー・ムハンマド・スーフィーによって訳されたと述べている [Dabistān 128] ことから、この翻訳も広く読まれていたことがわかる。

9) 現在、『ヨーガヴァーシシュタ』の祖形にあたる『解脱への手引き (*Mokṣopāya*)』の写本の収集と校訂が Prof. Walter Slaje を中心に進められており、第5冊まで校訂本が出版されている [Steiner 2014]。

10) 皇帝アクバルの時代のペルシア語訳『ヨーガヴァーシシュタ』の研究としては Franke 2011 がある。またペルシア語訳写本の一部には、*Mokṣopāya* のタイトルをもつものも残されており、現在、京都大学人文科学研究所の小倉智史氏により調査が進められている。

11) ダーラー・シュコーによるペルシア語訳を校訂出版したアービディーは、訳者はダーラー・シュコーの秘書を務めていたバーバー・ワリー・ラーム (*Bābā Walī Rām* 別名バンワリー・ダース *Banwalī Dās*) ではないかという考えを示している [PYV: 11]。ワリー・ラームは『智慧の月の出 (*Prabodhacandrodaya*)』というサンスクリット語とブラークリット語を交えた寓話的戯曲をペルシア語訳したことで知られる。

スーフィー・シャリーフに帰される著作は、ヨーガに関連する小論がほとんどで、既に紹介した GŚ のペルシア語訳を含む『息の保持 (*Pās-i Anfās*)』を始めとして5つの論攷が残っている。訳語や文体から、これらの論攷は同一人物によるものとみなすことができる。残念ながら、一点を除いてすべて写本の形でしか残っていないことから、今まではほとんど顧みられることがなかった。これらの論攷の著者が、『ヨーガヴァーシシュタ・サーラ』の訳者であるスーフィー・シャリーフと同一人物であるとするなら、ジャハーンギールの王子時代から皇帝時代までに活躍したと考えられる。

スーフィー・シャリーフの論攷の存在は既に簡単に紹介したが [榊 2013: 90(147)], 新たに発見された資料を含めて少し詳しく内容を見ておこう。

1) 『息の保持』¹²⁾

マツェンドラナータとゴーラクシャナータの対話の形をとったもので、201 詩節からなる大本『ゴーラクシャシャタカ』(GŚ) や 10 章からなる『ハタプラディーピカー』などからの撰文を含むナータ派ヨーガの論攷である。この書については既に詳しく紹介したとおりである [榊 2013: 99(138)-91(146)]。

2) 『秘密の開示における光 (*Anwār dar Kashf-i Asrār*)』¹³⁾

この書は『ウマーとマヘーシュヴァラの対話 (*Umāmaheśvarasamvāda*)』のペルシア語訳であるとされる。ここでは、パールヴァティー (ウマー) の質問に対してマヘーシュヴァラが応える形で、ケーチャリー・ムドラ、大宇宙と小宇宙の相応関係、内我と最高我の関係、小世界の構造、シャクティとチャクラ、10 種のプラーナ、10 種の脈管、3 神格と 3 グナ、智者、離欲、ヨーギンの為すべき行為とは何かについてなどを説く。「ウマーとマヘーシュヴァラの対話」と称される対話篇は、『マハーバーラタ』やプラーナやタントラ文献に数多く存在する。このペルシア語小論と同じ内容を満たすものはまだ同定できていないが、おそらくはタントラ文献の中に見出すことができると考えられる。

3) 『光の開示に関する不思議なやり方 (*Gharā'ib al-Aṭwāl fi Kashf al-Anwār*)』あるいは『クリシュナとマハーデーヴァの対話 (*Suwal wa Jawāb-i Shri Krishna wa Shri Mahādīv*)』¹⁴⁾

この書は、『クリシュナ (ハリ) とマハーデーヴァ (シヴァ: ハラ) の対話 (*Hariharasamvāda*)』(HHS)¹⁵⁾ のペルシア語訳である。同定されたサンスクリット語の 2 つの写本のうちの 1 つのコロフォンで、この対話篇は「シヴァ・アーガマ」の「ヨーガ・

12) Ms. Habib Ganj Collection (Persian) 21/346, Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University, ff. 14.

13) Ms. Habib Ganj Collection (Persian) 21/345, Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University, ff. 14.

14) Ms. Or. 13743, ff. 95v-116. British Library, London, pp. 147-172.

15) Ms. Bl 15977, (Indira Gandhi National Centre for the Arts Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune), ff. 16.

シャーストラ」の中に含まれると述べられていることから、シャイヴァ・タントラの一部であると考えられる [f. 16a]。HHS は 145 詩節からなり、クリシュナによる 27 の質問にマハーデーヴァが応える形となっている。主題は、神の本質を知る方法、宇宙論、業の果報、ヨーガの 3 つの段階 (*ārambha*, *ghaṭa*, *paricaya*)、脈管論、念想法、念想の対象、離欲 (*vairāgya*)、微細身論、心の制御法、神の本質としての光、叡智の獲得法などからなる。ペルシア語訳は 20 の対話からなり、クリシュナの質問に応じてマハーデーヴァが多岐にわたるヨーガ行、微細身論、心の鎮め方、アートマンを知る智などを説く形をとっている。

4) 『念想の驚異 (*'Ajā'ib al-Afkār*)』¹⁶⁾

「ギター・サーラ (*Gitāsāra*)」のペルシア語訳と題された論攷である。『バガヴァッド・ギター』のペルシア語訳とその付属詩節としての『ギター・サーラ』の歴史については既に紹介した [榊 1991]。後代、『バガヴァッド・ギター』を模倣したさまざまなサンスクリット語のギター文献が生みだされたが¹⁷⁾、『念想の驚異』は、すでに広く流布していた『バガヴァッド・ギター』の付属詩節としての「ギター・サーラ」とは異なる内容をもつもので、さまざまなギター文献の中の『ウッタラ・ギター (*Uttaragītā*)』(UG) のペルシア語訳であることがわかった。UG は全 3 章 119 詩節からなり、『バガヴァッド・ギター』の付属詩節としての「ギター・サーラ」の詩節ときわめて似たものも含む。アルジュナとクリシュナの間答の形をとり、第 1 章はアートマンの本質を知るための手段、第 2 章は個我とブラフマンが不二であること、大宇宙と小宇宙の相応、第 3 章はヴェーダや聖典の知識を超えたブラフマンの念想の優位性について述べる¹⁸⁾。

『念想の驚異』では 8 つの対話で、「光の本質」と呼ばれる世界の本質を知る方法としてのさまざまなヨーガの行法、音声の生じるところ、個我の生命、姿形をもたないお方の念想法、感覚器官の働きを制御しての念想法、粗大なる肉体がいかにして微細な最高我と一つとなるのか、神を束縛するものは何か、念想法の要訣などが説かれる¹⁹⁾。UG の 2 章に「ブラフマンを知る智慧 (*brahma-jñāna*)」として説かれるミクロコスムとしての微細身にマクロコスムとしての 14 世界や神格などが相応するという解説は省略されている。

16) Ms. Ahsan Collection (Persian) 297. 7/57, Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University, ff. 7.

17) ペルシア語に訳されたものとしては、『アディアートマ・ラーマヤナ (*Adhyātmarāmāyana*)』に含まれる『ラーマ・ギター (*Rāmagītā*)』、『アシュターヴァクラ・ギター (*Aṣṭāvakraḡitā*)』などが残されている。

18) この書は、「ヨーガに関する権威のあるテキスト」[Larson, Bhattacharya 2008: 583]であるとか「『バガヴァッド・ギター』の続きとみなされるが、実際にはヨーギンのための簡便なマニュアルのようなもの」[Gonda 1977: 276]とも評価されている。

19) 簡略化されスーフィー的解釈が含まれるとはいえ、「一切世界は神の顕れであり、個我 (*jīvātman*) と最高我 (*paramātman*) に本質的な違いがない」に関連する比喩表現「水は水の中で、乳は乳の中で、油は油の中でいかなる違いもない。どちらも同じ真実である」(UG 2.2) を引用するなど、サンスクリット原典との対応関係がみられる。

5) 『光を顕し出す驚異の方法 (*Gharā'ib Atwār fi Kashf al-Anwār*)』あるいは『秘密を解く方法 (*Atwār dar Hall-i Asrār*)』(PYVS)²⁰⁾

これは既に紹介しているように『ヨーガヴァーシシュタ・サーラ』(YVS)のペルシア語縮訳である。先にダーラー・シュコーがこのシャイフ・スーフイー(スーフイー・シャリーフ)による訳を読んでいたことを紹介したが、YVSは全10章230詩節からなる。ペルシア語訳では、10段階(tawr)に分けられ123の問答からなる。「ラームチャンドよ」という呼びかけをともなつて、ヴァシシュタが『ヨーガヴァーシシュタ』のエッセンスを示しつつ、現象世界は無知によって現出されたものにすぎず実体性がないことを説く。その主題は、離欲、世界は心の生みだした想いに過ぎないこと、解脱、心を対象から引き離すこと、欲望を取り除くこと、自我を知ること、神の靈知、自己の境地を知ること、神を完全に知ることなどからなる。

短い論攷ばかりではあるが、スーフイー・シャリーフはナータ派ヨーガの教理や行法を説明するのに、イスラーム神学やスーフイー修道論の術語を駆使し、翻訳・解説に努めつつ独自の解釈を加えている。

2 スーフイー・シャリーフの説く瞑想の場所

2.1 スーフイー・シャリーフの示すチャクラ論

スーフイー・シャリーフに帰せられる論攷のうち、瞑想の対象としての身体の場所について言及しているのは、『息の保持』、『ウマーとマヘーシュヴァラの対話』、『クリシュナとマハーデーヴァの対話』と『念想の驚異』である。

『息の保持』では、GSの記述に沿って、チャクラが7つあることが示される。

人間の身体には6つのCKR (*cakra*) すなわち6つの階梯 (*maqām*) がある。第1はADHAR (*ādḥāra*) であり、その場所 (*maḥal*) は肛門である。第2はSWADHShTAN (*svādhiṣṭhāna*) であり、その場所は脈管の出口である。第3は臍である。第4は「松毬の形をした心」である。それは左の乳の下の胸にある。第5はTAL (*tālu*) であり、喉のくびれの所にある。第6は眉間にあり、それをインドの言語でTRKNY (*trikona*) と呼ぶ。第7はすべてのCKRの上方にあるCKRであり、その場所は脳天である。それを「球体の心」とも呼ぶ。それはインドの言語ではSHNS DL (*sahasra-dala*) すなわち千枚の花弁をもつとも呼ぶ。(f. 6a)

チャクラの名称が欠落しているものもあるが、GSに説かれる7つのチャクラの解説を受けたものである[GS 15-25]。スーフイー・シャリーフの表現では、「松毬の形をした心」は第4のチャクラのあるスーフイーもその名で呼ぶ心臓を、「球体の心」は第7のチャクラのある「脳天」を示していることがわかる。

20) この書は他の小篇とともに合本して石版印刷された[PYVS: Majmū'ah-i Rasā'il 1877]。

『息の保持』の後半では、瞑想の対象としてのこれらのチャクラの名称と花卉の数と色とその特性、そこに念想することで獲得される果報が説かれる。肛門にある第1のCKR、尿管の出口にある ShADHShTAN CKR、臍にある CKR、松毬の形をした心臓にある CKR、喉の輪にある KRTKA CKR (*ghaṅṭikā-cakra* 口蓋のチャクラ)、眉間にあり二枚の花弁をもつ NKAH (?) そして頭頂にある AGYA CKR (*ājñā-cakra*) の名称が示され、「千枚の花弁をもつものに念想すると(神の)唯一性 (*waḥdat*) の特質が明らかになり、自我意識が消滅し (*fāni*)、神と共に存続する (*bāqī*)」と説かれる。(ff. 12a-13a) これらは不明瞭な呼称を含むものの、GS 後半に説かれる鼻端に視線を集中してそれぞれのチャクラにアートマンを念想することによって得られる果報を受けている [GS 165-175]。

GS では、これに続いて「ヨーギンらによる瞑想の対象となる場所 (*dhyānasthāna*)」として肛門、陰茎、臍、心臓の蓮、額の月、口蓋、口蓋垂、眉間、空孔 (*nabhobila*) の9か所が示されている [GS 177, 178]。『息の保持』では省略されているが、KP では、死の予兆が見えたときにそれを排除するための念想法としてこれら9つの「ヨーギンらによる瞑想の対象となる場所」が示されている (ff. 19b-20b)。

『ウマーとマヘーシュヴァラの対話』では、これらのチャクラは呼吸の制御法において、「神の光」を念想しつつ保持された息を上昇させていく場所として示される。「インドの言語でそれを6つの蓮 (*kanwal*) と呼んでいる6つのCKRは、念想の行を達成する場所である」として、MWLADHAR (*mūlādhāra*)、SWADHShTA (*svādhiṣṭhāna*)、MNPWR (*maṇipūra*)、
「松毬の形をした心」である ANAHT (*anāhata*)、BSDH (*viśuddha*)、URADH (*ūrdhva*)
そして第7のCKRは脳天にあり千枚の花弁をもつ「球体の心」の場所であるとされる。そして「息をひきあげてこれら6つのCKRを通過させて7番目のCKRに至らせ、「神の光 (*nūr allāh*)」を念想し、この行が習慣となれば目的を遂げる」(ff. 6b-7a)と説く。

2.2 スーフィー・シャリーフの説く3つの「心」

ウッドロフが言及した「蓮の形をした心」、
「松毬の形をした心」、そして「球体の心」と
ダーラー・シュコーが表現した3つの「心」についてそろって言及されるのは、『ウマーとマヘーシュヴァラの対話』と『クリシュナとマハーデーヴァの対話』そして『念想の驚異』においてである。

『ウマーとマヘーシュヴァラの対話』では、第7の問いで、パールヴァティーがマヘーシュヴァラに「ShKT (*śakti*) すなわち「神の光」を念想する3つの場所は、身体の中のどこにあるのか」を問う。これに対してマヘーシュヴァラ (シヴァ) は、第1のShKTは脳天にある「球体の心」に、第2のShKTは胸にある「松毬の形をした心」に、第3のShKTは臍にある蓮 (*nilūfar*) にいて、創造主の純粹本質 (*zāt-i pāk*) がこれら3つの場所に顕れており、ここに神の輝き (*munawwar-i haqq*) を念想すれば神を知るのだと説く。(f. 6b)

『クリシュナとマハーデーヴァとの対話』では、10番目の問いで、アルジュナはクリシュ

ナに神を発見するための瞑想 (murāqabah) のやり方を教えてほしいと求める。「この行をなす人は、自らの心の内奥のどの場所にあなたの現れる姿を想像して、心の眼でその場所に帰属させるのか。なぜなら個我 (jān) の心には「球体の心」、「蓮の形をした心」と「松毬の形をした心」という3つの場所があるからだ。この行における行為者は個我なのか、それとも心なのか。」と問う。マハーデーヴァは、「この行は、蓮の形をした心において優れた個我がなすもので、個我は肉体の眼でその場所で念じる対象に近づくのだ」と答える。(ff. 2b-3a) 両者に共通するのは、これら3か所がシャクティが現れ出るところや神の顕現するところだということである。後者の原典 HHS では、クリシュナが念想 (dhyāna) とは何かと問うのに対して、マハーシュヴァラは落ち着かない心 (manas) を安定させることであり、賢者は心によりアートマンを知るのだと応える (v. 23-25)。

『念想の驚異』では、より明確にこれら3つの「心」が示される。アルジュナは最初の問いで、アートマンの本質を知ることに関して、瞬時に解脱をもたらす智慧とは何かと尋ねる。そのときアルジュナは、世界の本質について自らが「光り輝く本質 (zāt-i nūrāni)」と呼んだものの属性を数え上げていく。それは実在者であり、独存者であり、いかなる束縛も受けず、あらゆるものを超越し、比類なき者であり、理性や知識を本質としてもち、光り輝く唯一者であるという。そしてこのような属性をもつ世界の本質を知る方法をクリシュナに問う。(f. 1a) UG では、註釈でアートマンの本質としてここに述べている属性が説かれる [Gauḍapāda ad UG 1.2]。UG には説かれないが、スーフィー・シャリーフは念想法とその果報として獲得される状態を含め、7種類の靈知を獲得する方法を示す。

第1にアパーナ風を引き上げる行法が説かれる。左側の気道 (idā) を通して、12枚の花弁をもち顔を上に向けた蓮の「松毬の形をした心」と呼ばれる住処からアパーナ風を引き上げて眉間に至らせ、ついで眉間から脳天に至らせる。その場所でこの息をとどめておく。この行をなしている間はずっと「光り輝く本質」を念想し、息を上に取り上げ、そして息を保持する。すると「彼は我なり」「我は彼なり」という境地 (hālat 神によって与えられる状態) が生じる。そして「我は神なり (anā al-ḥaqq)」という秘密が明らかになる。その行に熟達すれば、彼は自分自身を「彼 (神)」であると思い描く。そうすれば、彼には「神の顔以外のものはすべて滅びる」という (クルアーンの聖句の) 秘密が明らかになる。先に述べた行においては、純粹存在 (ḥastī maḥḍ) 以外は何ものも目に入らず、心の内にも外にも「光り輝く本質」以外は入らないようにと念じるべしと説く。(f. 1b)

第2に同じやり方で右側の気道 (piṅgalā) を通してプラーナ風を引き上げる行法、第3に舌を引き延ばして口蓋や眉間に達するまで引き延ばすケーチャリー・ムドラー (Khecarīmudrā) の行法、第4に鼻端に視線を集中させ、インドの行者らが空 (śūnya) と呼ぶ純粹存在を念想する行法が説かれ、これにより輪廻 (tanāsukh) から解放され、神格 (精靈 rūḥāni) の世界に入るといふ。第5に息を吸い込み保持し吐き出す時間を変えての調気法、第6に両方の鼻孔を同時に使った調気法が詳述される。そのあとに、クリシュナは

付け加える。「インドの行者らにより SHNDLKNWL (*sahasradala-kamval*) と呼ばれる脳天にある「球体の心」、DWADSKNWL (*dvādaśa-kamval*) と呼ばれる「松毬の形をした心」、そして臍にある「蓮 (*kamval*) の心」と呼ばれる「蓮の心 (*dil-i nilūfar*)」がある。有無の関係性を離れ、善悪という束縛を離れることにより、SMADH (*samādhi*) と呼ばれる状態に消融 (*istighrāq*) する」(ff. 2b-3a)。

スーフィー・シャリーフが「シャクティ」の語を用い「光り輝く本質」を念じる場所と称したのは、潜在的な生命エネルギーとみなされるクンダリーニ・シャクティ (*kuṇḍalinī-śakti*) が、スシュムナー (*sušumnā*) 脈管を進みつつ打ち破って行く3つの結節 (*granthi*) の在り処を示していると考えられる。それらはブラフマンの結節 (*brahma-granṭhi*)、ヴィシュヌの結節 (*viṣṇu-granṭhi*)、ルドラの結節 (*rudra-granṭhi*) と呼ばれる。結節の在り処をめぐっては諸説があり、心臓・喉・眉間のチャクラに、肛門(尾てい骨)・心臓・眉間のチャクラ、肛門(尾てい骨)・臍・喉のチャクラに、あるいはそれぞれのチャクラの間にあるなどとされる。

ナータ派ヨーガの古典としてHPに先行し『ヨーガシカー・ウパニシャッド』に並行句をもつ『ヨーガビージャ (*Yogabīja*)』では、保息する間にバンダヤクリヤーと呼ばれる身体技法によりシャクティを動かす行 (*śakticālanā*) は、クンダリーニを目覚めさせ、息の力と腹の中に生まれる火によってスシュムナー脈管の入り口にあるブラフマン結節に入り込ませ、スシュムナー脈管を上昇させ、心臓のチャクラにあるヴィシュヌ結節を貫き、ルドラ結節を貫いて頭頂に至らせる。[YB 87-92, 118-119; YŚU 1.82-87, 112-114] 『ヨーガクンダリー・ウパニシャッド (*Yogakuṇḍalī-up.*)』では、特別な保息 (*bhastrikā-kumbhaka*) によりクンダリーニを目覚めさせて3つの結節を突き破らせると説かれる [YKU 34, 62-62, 85]。

3つの結節は単なる領域を分ける節ではなく、調息によっておこる意識の深化の段階を示すものでもある。HPの註釈によれば、クンダリーニ・シャクティが3つの結節を突き破るとき生じる内的音の現れから意識の深化の4つの状態、すなわち開始 (*ārambha*)、精励 (*ghaṭa*)、熟知 (*paricaya*) そして完成 (*niṣpatti*) の段階を獲得したことが理解され、結節はこれらの段階を隔てるもの²¹⁾とされる。[Jyotsnā ad HP 4.69-76] 『ヨーガタットヴァ・ウパニシャッド (*Yogatattva-up.*)』でも、それぞれの結節が上方の段階への入り口となることを説く [YTU 81cd-103cd]。

スーフィー・シャリーフは、これらの中樞に「創造者の純粹本質」が現れ、そこに「光り輝く本質」を念想することにより「神を知ること」に至ると解釈した。そこで獲得される状態がヨーガの三昧という心の状態であり、それはスーフィー道でいう「我は神なり (*anā al-ḥaqq*)」という神の顕現する境地であると理解したのである。

21) シヴァ教のシュリーヴィディヤー派では、チャクラは下から2つずつの層に分けられ、火の領域である *mūlādhāra*、太陽の領域である *maṇipūṛaka*、月の領域である *brahmarandhra* を重視するという [井田 2012: 73]。そこに結節のある境界ととらえているのであろう。

結 び

チャクラは、生理学的には中央脈管（スシムナー）と称される脊髄の中を通る神経の中樞に当たる神経叢をさすと言われる。瞑想状態で微細な身体の中に想定されるチャクラに精神集中し、呼吸の制御を伴って心の力で光に象徴される自己の本源を直観する行法は、インドにおける宗派の異なる行者たちに共通して受け入れられた。彼らは、数や名称や配置場所に違いをもちつつもチャクラや結節や（体内）聖地（*ṣiṭha*）などと呼んで、それぞれの哲学的思弁を背景に理論と実践法を発展させてきた。

本稿の考察の結果明らかになったことは、チャクラ論はクンダリーニー・シャクティ論と共に、ナータ派ヨーガの修道論のペルシア語やアラビア語への翻訳・翻案文献をとおしてイスラームの修行者たちに伝えられ、瞑想体験を通して神との近侍や一体性を直観する装置として共通の理解をもって受け入れられたことである。その一つの証左が、スーフィー・シャリーフという人物により生み出された3つの「心」という表現であり、ダーラー・シュコーのスーフィー修道論にも取り込まれることになったのである。

近年、ハタ・ヨーガに関するサンスクリット語写本の収集と新たな校訂が進められつつあり、ヨーガの伝統のより精密な理解が文献の上で可能になりつつある。それと同時に、同時代の資料として、アラビア・ペルシア語の翻訳・翻案や綱要書として著された文献の重要性が認められつつあり、さらなる文献的な調査・研究が求められている。

参考文献

- BH: *Baḥr al-Ḥayāt*. Muḥammad Ghawth Gwāliyārī. Delhi, 1311 A. H. (1893-4).
- Dabistān: *Dabistān-i Mazāhib*. Mobed Kaykhusraw Isfandiyār. Malik, Raḥīm Riḍzāzādah (ed.), vol. 1, Tehran, 1362 (1983).
- GŚ: *Das Gorakṣasataka*. Nowotny, Fausta (ed.), Köln, 1976.
- HHA: Ḥawḍ al-Ḥayāt, La version arabe de L'amratkund. Yusuf Husain (ed. and tr.). *Journal Asiatique*, CCXIII, Octobre-Décembre. 1928, 291-344.
- HP: *The Haṭhayogapradīpikā of Svātmārāma: with the commentary Jyotsnā of Brahmānanda, and English translation*. Madras, 1972.
- MB: *Majma' al-Baḥrayn*. Dārā Shukoh. S. M. Reza Jalāli Nā'ini (ed.), Tehran, 1982 (Repr. 1987-8).
- PYV: *Yogavāsistha*, Tara Chand, S. A. H. Abidi (eds.). Aligarh, 1968.
- PYVS: Aṭwār dar Ḥall-i Asrār. *Majmū'ah-i Rasā'il*. Lucknow, 1877.
- RHN: *Risālah-i Haqq Numā*. Dārā Shukoh. Lucknow, 1896.
- SA: *Sirr-i Akbar*. Tara Chand, S. M. Reza Jalāli Nā'ini (eds.). Tehran, 1957.
- UG: *Uttaragītā: Śrīgaṇḍapādācāryaviracitayā vyākhyayā sametā*. Bālasubrahmanyam, K. (ed.). Śrīraṅgam, 1926.

- VM : *The Vivekamārtāṇḍa of Viśvarūpadeva*. Sāmbaśiva Śāstrī, K. Trivandrum, 1935.
- YB : *Yogabīja with English and Hindi translation by Siddha Guru Gorakṣanātha*. Awasthi, Brahmamitra (ed. and tr.). Delhi, VS2042 (1985).
- YKU : Yogakuṇḍali-upaniṣad. *The Yoga Upaniṣads : with the commentary of Śrī Upaniṣad-Brahmayogin*. Mahadeva Sastri, Alladi (ed.). Madras, 1968.
- YŚU : Yogaśikhā-upaniṣad, *The Yoga Upaniṣads : with the commentary of Śrī Upaniṣad-Brahmayogin*. Mahadeva Sastri, Alladi (ed.). Madras, 1968.
- YTU : Yogatattva-upaniṣad. *The Yoga Upaniṣads : with the commentary of Śrī Upaniṣad-Brahmayogin*, Mahadeva Sastri, Alladi (ed.). Madras, 1968.
- YVS : *Yogavāsiṣṭhasāra*. Thomi, Peter (ed.). Wichtrach, 1999.

- Buehler, Arthur F. (1998) *Sufi Heirs of the Prophet, The Indian Naqshbandiyya and the Rise of the Mediating Sufi Shaykh*. Columbia.
- Davis, Craig (2005) The Yogic Exercises of the 17th Sufis, In : Jacobsen, Knut A. (ed.) *Theory and Practice of Yoga : Essays in Honour of Gerald James Larson*. Leiden, 303-316.
- Ernst, W. Carl (2003) The Islamization of Yoga in the Amṛtakuṇḍa translations, *Journal of the Royal Asiatic Society*, Series 3, 13-2, 199-226.
- Ernst, W. Carl (2011) A Fourteenth-Century Persian Account of Breath Control and Meditation. In : White, David Gordon (ed.) *Yoga in Practice*. 133-139.
- Ernst, W. Carl (2013) Traces of Śattari Sufism and Yoga in North Africa. *Oriente Moderno*, XCII/2, 361-367.
- Franke, Heike (2011) Akbar's Yogavāsiṣṭha in the Chester Beatty Library. *ZDMG*, 161-162, 359-375.
- Gonda, Jan (1977) *Medieval Religious Literature in Sanskrit* (A History of Indian Literature, v. 2, Epics and Sanskrit Religious Literature, fasc. 1). Wiesbaden.
- Herklots, G. A. (1972) *Islam in India or the Qānūn-i Islām : The Customs of the Musalmāns of India*. London (first published in 1921).
- Kugle, Scott (2012) *Sufi Meditation and Contemplation : Timeless Wisdom from Mughal India*. New Lebanon.
- Larson, Gerald James & Shankar Bhattacharya (eds.) (2008) *Yoga : India's Philosophy of Meditation*. In : Potter, Karl H. (comp.), *The Encyclopedia of Indian Philosophies*, (v. 12). Delhi.
- Marshall, D. N. (1985) *Mughals in India*, London.
- Massignon, L. & Cl. Huart (eds.) (1926) Les entretiens de Lahore, [Entre le prince impérial Dārā Shikūh et l'ascète hindou Bābā La'l Dās], *JA*, CCIX, Octobre-Décembre, 285-334.
- Mujtabai, Fathullah (2006) *Muntakhab-i Jūg-bāsiṣṭha* (*Selections from the Yoga-vāsiṣṭha*). Critical edition of the text and English translation with introductory studies, notes and glossary, Mir Abu'l-Qāsim Findiriskī. Tehran.
- Qādiri, Faḍil Aḥmad (1996) *Tārikh-i Mashrab-i Shaṭṭār*. Aligarh.

- Sanūsī, Muḥammad ibn 'Alī (1989) *al-Salsabil al-mu'in fi al-tarā'iq al-arba'in*. al-Qāhira.
- Vasu, Rai Bahadur Srisa Chandra (1912) *The Compass of Truth or Risālah-i Ḥaqq Numā'*. Allahabad.
- Steiner, Roland (2014) *Mokṣopāya: Übersetzung, Teil 4. Das Fünfte Buch. Das Buch über das Zurruhekommen*. Wiesbaden.
- Taylor, Kathleen (1996) Arthur Avalon: The Creation of a Legendary Orientalist. In: Leslie, Julia (ed.) *Myth and Mythmaking, continuous evolution in Indian Tradition*. Richmond.
- Trimingham, J. Spencer (1973) *The Sufi Orders in Islam*. Oxford.
- Woodroffe, Sir John (2001) *The Serpent Power being the Ṣaṭ-cakra-nirūpaṇa and Pādūkā-pañcaka: two works on Laya-yoga, translated from the Sanskrit, with introd. and commentary*. Madras. (repr.)
- 井田克征 (2012) 『ヒンドウタントリズムにおける儀礼と解釈——シュリーヴィディヤー派の日常供養——』昭和堂
- 遠藤 康 (2008) インド中世ヨーガ文献の研究「ゴーラクシャシャタカ」(小本) 試訳『愛知文教大学比較文化研究』9, 39-74.
- 榊 和良 (1991) 「バガヴァッド・ギーター」ペルシア語訳について『印度学仏教学研究』39-2, 972-969.
- 榊 和良 (1999) 神の名前——スーフィーとバクタの出会い——『国学院雑誌』106. 3, 35-47.
- 榊 和良 (2000) 「甘露の水瓶」とスーフィー修道法『東洋文化研究所紀要』139, 272(173)-239(206).
- 榊 和良 (2002) ナータ派研究序説『印度哲学仏教学』17, 165-178.
- 榊 和良 (2003) ナータ派研究「息の保持」『印度哲学仏教学』18, 107-121.
- 榊 和良 (2004) 『全哲学綱要』に現れた「スヴァラの学」『印度哲学仏教学』19, 132-156.
- 榊 和良 (2005) Yogico-tantric Traditions in the Ḥawq al-Ḥayāt, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 17, 135-156.
- 榊 和良 (2013) ヨーガの実践とペルシア語訳「ゴーラクシャシャタカ」『東洋文化研究所紀要』163, 108(129)-80(157).
- 二宮文子 (2014) インドのイスラーム思想——修行論に見られるインド思想との交流——『知のユーラシア2 知の継承と展開——イスラームの東と西——』堀川 徹(編) 明治書院 155-175.
- 中田 考 (1995) 「アル=シャーフィイー師の道(学派)に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び」訳注(2)『東洋文化研究所紀要』128, 179-257.
- ミルチア・エリアーデ (1975) 『ヨーガ2 エリアーデ著作集』第十卷 立川武蔵(訳) せりか書房.

(北海道武蔵女子短期大学)